

Title	漱石詩六則
Author(s)	一海, 知義
Citation	中國文學報 (1995), 50: 148-157
Issue Date	1995-04
URL	http://dx.doi.org/10.14989/177576
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

漱石詩六則

一 海 知 義

神戸學院大學

一 全集の「漢詩」

夏目漱石（一八六七—一九一六）の漢詩作品は、生前ままとまった形では刊行されなかった。詩集としてはじめて形をととのえるのは、没後二年を経た大正七年（一九一八年）である。

岩波書店による最初の『漱石全集』（第十卷）の「漢詩」の部分でそれであり、作品数は百七十一首、詩集のあとに付された漢文「木屑錄」（房總地方紀行文）中の漢詩十四首と合わせると、總數百八十五首となる。

翌大正八年（一九一九年）、岩波書店は單行の和裝本『漱石詩集』を刊行するが、その收録作品は前年の全集本と變らない。

次到大正十三年（一九二四年）刊行の全集は、七年版のそれに漢文「七草集評」（正岡子規の自選アンソロジー『七草集』に漱石が批評を加えたもの、中に漢詩作品九首を含む）を加え、作品数は百九十四首となった。

そして次の昭和三年（一九二八年）版全集は、大正十三年版をそのまま踏襲するが、さらに次の昭和十年（一九三五年）版は、新たに三首を加えて、百九十七首を收録する。

昭和三十年（一九五五年）、同じ岩波書店から新書版全集が刊行された。その收録作品は昭和十年版を襲いつつ、從來全集に採られてきた「大井川舟中」と題する一首（制作年代未詳、漱石の作と十分には確定されていないもの）を省く。したがって作品数は、百九十六首。

現在、岩波書店は新たな全集を刊行しつつあるが、新書版以後現在までもう一度全集が刊行されている。刊行がはじまったのは昭和四十年（一九六五年）、その第十二卷（六七年刊）が「漢詩文」を収める。そこにはさきの「大井川舟中」も加えられ、さらにその後發見された十首をこえる作品をも加えて、總數二百八首が收録されている。しかし

それらの中には、漱石の作でないもの、後述するように中國宋代の詩人の作が一首含まれている。

ところで従來の全集は、これまた後述するように、漱石の作とほぼ確定しうる一首（大正三年頃の作）を収めていない。したがって、さきの中國人の作を除き、この一首を加えると、作品總數はやはり二百八首となる。

以上が、岩波版全集が収める漢詩作品數の變遷である。

二 未 定 稿

漱石の小説や隨想、日記、ノートの類には、時に未定稿の漢詩作品や、斷片的な詩句がしるされている。

たとえば『草枕』第十一章に、

觀海寺の石段を登りながら仰數春星一二三と云ふ句を得た。

などというのは、その一例である。この句は、單に漢字七字を並べたというのではなく、ちゃんと平仄が合っている。仄仄平平仄仄平。

それらのうち、あるものはのちに手が加えられて完成作

漱石詩六則（一海）

品となる。しかし、未定稿、未完成のまま打ち捨てられたものも、すくなくない。その大部分は、斷片的な一句、あるいは數句だが、律詩や絶句の形をとった未定稿の作品も、ないわけではない。

たとえばその一例は、晩年、小説『明暗』を執筆していた時の「漢詩ノート」（東北大學附屬圖書館漱石文庫藏）に見える。そのことは、すでに加藤二郎氏によって指摘されているが（『『明暗』期漱石漢詩の推敲過程』、『宇都宮大學教養部研究報告』第二十二號、一九八八年十二月）、ここに讀み下し文を添えて示せば（以下、引用する詩文の讀み下し文は、すべて筆者による）、

無心卻是最神通	無心	卻	つて	是	れ	最	も	神	通			
隻眼須知天地公	隻眼	須	く	知	る	べ	し	天	地	の	公	
日照蒼茫千古大	日	は	蒼	茫	を	照	ら	し	て	千	古	大
風吹碧落萬秋雄	風	は	碧	落	を	吹	き	て	萬	秋	雄	なり
生流轉誰呼夢	生	生	の	流	轉	誰	か	夢	と	呼	ば	ん
念念追求眞似空	念	念	の	追	求	眞	に	空	に	似	た	り

欲破龍眠勿忽卒

龍眠りゅうみんを破らんと欲して 忽卒そうちつたる

勿なかれ

白雲深處躍金龍

白雲深き處 金龍おど躍る

漱石は、ノートのこの詩の上に何本か斜線を引いて、自ら採らざることを示す。そしてノートの清書部分には、この作品を書きとめていない。

加藤氏は、この作品が「七言律として體裁上一應の整いを見せて」いるというが、律詩の法則にてらしていくつか難點があり、漱石はそのためこれを未完成の作品として捨てたのであろう。その點については、かつてややくわしくふれたことがある（『漱石漢詩札記』、『圖書』一九九三年十月號）。こうした未定稿は、ほかにも絶句などの形で、日記・ノート等の中にすでに數例が散見され、今後資料の探索がすすめば、あるいは更に發見されるかも知れない。

三 全集未收の詩

一九六七年版『漱石全集』（第十二卷）が、中國宋代の詩

人劉りゅうしゅう敞の五絶一首を、誤って漱石の作として収めていることは、今ではよく知られている。

それは、漱石舊藏本『箋註宋元明詩選』（東北大學附屬圖書館漱石文庫藏）に見える次の一首である。詩題は、「雨後回文」。

綠水池光冷 綠水 池光冷やかに

青苔砌色寒 青苔 砌色寒し

竹深啼鳥亂 竹深くして 啼鳥亂れ

庭暗落花殘 庭暗くして 落花殘さんす

詩題にいう通り、これは回文の詩であり、轉倒させれば次のような一首になる。

殘花落暗庭 殘花 暗き庭に落ち

亂鳥啼深竹 亂鳥 深き竹に啼く

寒色砌苔青 寒色 砌苔青く

冷光池水綠 冷光 池水綠なり

詩題に「回文」となければ、これが回文詩であることに氣づく人は、すくないであろう。

漱石はこの詩の詩題も作者も示さず、ただ二十文字を墨書して、末尾に「漱石書」と自署した。そのため漱石作と誤られたものかと考えられる。

ところで一方、漱石作であることがほぼ確實でありながら、從來の全集が收めない作品が、すくなくとも一首ある。それは、「題自畫」と題する次の五絶である。

一路蕭條盡	一路蕭條として盡き
清溪馬上過	清溪馬上に過ぐ
朱欄何處寺	朱欄何處の寺ぞ
黃葉照僧多	黃葉僧を照らして多し

これは、漱石が西川一草亭（津田青楓の兄）に贈った『守拙帖』と題する書畫帖を、一草亭がほぐして表装したという軸物の形で、現存する（一九八一年角川書店刊『圖説漱石大觀』参照）。

漱石詩六則（一海）

この五絶は、たぶん大正三年頃の作であり、その頃漱石は「題自畫」と題する絶句を何首か書きのこしている。

なお、一草亭が隨筆集『風流生活』（昭和七年第一書房刊）の中で、この書幅かと思われる軸について、「七言絶句の幅」といつているのは、記憶の誤りであろうか。

四 漢詩ノート

さきにふれた『明暗』執筆期の「漢詩ノート」は、漱石の詩を正確に讀む上で、すくなくならぬ示唆を與える。またこの「漢詩ノート」以前にも、漱石自筆の草稿やメモの現存する作品がすくなくならずあり、それらも、ノートと同様の示唆を與える場合がある。

まず、「漢詩ノート」以前の詩の草稿について、その一、二の例を挙げておこう。

たとえば、明治二十八年五月作の無題詩四首の第四首（七律）は、從來の全集によれば次の如き作品である。

驚才恰好臥山隈　　驚才　恰好　山隈に臥するに
（どさい　あたか　さんわい）

夙託功名投火灰

夙に功名を託して 火灰に投ず

心似鐵牛鞭不動

心は鐵牛に似て 鞭うつも動かず

憂如梅雨去還來

憂は梅雨の如く 去つて還た來た

る

青天獨解詩人憤

青天 獨り解す 詩人の憤り

白眼空招俗士哈

白眼 空しく招く 俗士の哈い

日暮蚊軍將滿室

日暮れて 蚊軍 將に室に滿ちん

とし

起揮紈扇對崔嵬

起ちて紈扇を揮つて 崔嵬に對す

この七律の第二句に見える「夙託功名」という四文字について、六七年版全集の吉川幸次郎注は、「託の字讀みにくい。夙以功名とでもあるべきところか」、という。ところでこの四文字、漱石自筆の草稿には、「夙把功名」とある。大正七年版全集で初めて活字にするとき、「把」を「託」（あるいは「托」）とした誤植が、そのまま踏襲されてきたものと思われる。一句は、「夙に功名を把つて火灰に投ぜん」、というのであろう。

また、同年同月の他の無題詩に、次のような七律がある。

破碎空中百尺樓

空中百尺の樓を破碎すれば

巨濤却向月宮流

巨濤 却つて月宮に向かつて流る

大魚無語沒波底

大魚 語無くして 波底に沒し

俊鶻將飛立岸頭

俊鶻 將に飛ばんとして 岸頭に

立つ

劍上風鳴多殺氣

劍上 風鳴りて 殺氣多く

枕邊雨滴鎖閑愁

枕邊 雨滴りて 閑愁を鎖さず

一任文字買奇禍

一えに任す 文字の奇禍をかうを

笑指青山入豫州

笑うて青山を指して 豫州に入る

この詩は、明治二十八年五月三十日付正岡子規宛書簡に、「追加一律、斧正を乞ふ」として見える。

ところで、第六句「枕邊雨滴鎖閑愁」の第五字「鎖」、全集の書簡集では「銷」とする。しかし現存する詩稿では、「鎖」。六七年版全集は「鎖」とし、その吉川注に、「この字、「書簡集」では銷だが、銷では平仄の都合が悪い」、と

いう。その通りであって、銷は平字、鎖は仄字で、銷ならば、銷閑愁_レ平平平と、下三連のタブーを犯すことになる。以上が、草稿等によって文字を確定すべき例の一、二である。

次に『明暗』執筆期の「漢詩ノート」について。

とりあげるべき問題は、すくなくない。しかしその一部については、すでに前掲「漱石漢詩札記」でもふれ、また近い將來このノートを全面的に検討する準備をすすめているので、ここではこれまでに氣づいた諸例のうち、その一、二を挙げるにとどめる。

まず、きわめて些細なことを一つ。

『明暗』執筆期第五首目の七律、「行到天涯易白頭」という句ではじまる一首を、大正十三年以後の全集は、すべて「(大正五年)八月十六日」作とする。しかし「漢詩ノート」によれば、「八月十八日」が正しい。大正七年版の最初の『漱石全集』(第十卷)および和装本『漱石詩集』(大正八年刊)も、「八月十八日」作としており、誤りは大正十三年版の全集以後、踏襲されてきたものと思われる。

次に、大正五年九月二十三日作の七律について。

漫行棒喝喜縱橫
胡亂衲僧不值生

漫_{みだ}りに棒_{ぼう}喝_{かつ}を行_{おこな}いて 縱橫を喜ぶ
胡亂_{うらん}の衲僧_{のうそう} 生_{あた}に値_{あた}せず

長舌談禪無所得
禿頭賣道欲何求

長舌 禪を談じて 得る所無く
禿頭 道を賣りて 何をか求めんと欲する

春花發處正邪絕

春花 發_{ひら}く處 正邪 絶え

秋月照邊善惡明

秋月 照_{あた}らす邊 善惡 明らかな

王者有令爭赦罪

王者 令_い有りて 爭_いでか罪を赦_{あな}さん

如雲斬賊血還清

雲の如く賊を斬りて 血_ま還た清し

この詩の第七句、六七年版全集は、「王者令有りて争つて罪を赦す」と讀む。そして下三文字「爭赦罪」について、吉川注は、「この三字、實はよく讀めぬ。争の字は、今の中國語の怎、いかでか、の古い表記として、禪家の書に用

いられていよう。そうした使い方とすれば、争かでか罪を赦さんや、という。

ところで「漢詩ノート」によれば、「争赦罪」の初案は、「不容賊」。賊を容れず、あるいは、賊を容さず、と讀ませるのであろうが、容は平字で、平仄が合わぬ。そこで「ノート」は、「容」を仄字の「許」に改め、「争許賊」とする。そして、この三字を、さらに「不赦罪」と改め、最終的には「不」の字を「争」に改めて、定稿は「争赦罪」に落ち着く。

「漢詩ノート」はこうした推敲の経緯を示しており、「争」を「いかでか」と讀むべきことを示唆する。

このような例はほかにもあり、前述のように、漱石の詩を漱石の意に沿って正確に讀む上で、「漢詩ノート」はすくなくからぬ示唆を與える。

五 朱 批 の 詩

熊本時代（明治二十九年）の作品に、次のような長い詩題をもつ五絶五首がある。句讀點を加えて詩題を示せば、

丙申五月、有靈芝生於恕卿之庭。恕卿因徵余詩。余辭以不文。恕卿不聽、則賦之爲贈。恕卿者片嶺氏、余僚友也。

ところで從來の全集は、すべて（和裝本『漱石詩集』も含めて）この詩題を次のようにしるす。

丙申五月、恕卿所居庭前生靈芝。恕卿因徵余詩。余辭以不文。恕卿不聽。賦以爲贈。恕卿者片嶺氏、余僚友也。

異同の箇所は多くないが、前者が漱石の作、後者はこれに漢詩人本田種竹（一八六二—一九〇七）が手を加えて、改めたものである。

漱石が東京の正岡子規を通じて、本田種竹に添削を依頼した経緯については、漱石の子規宛書簡（明治二十九年十一月十五日付）に見え、種竹が朱批を加えた原稿が現存する（一九七九年求龍堂刊『夏目漱石遺墨集』第一卷参照）。

五絶五首については、それぞれ次のように添削されている。上が漱石の原作、下は朱批が加えられたのちの作品である。

階前栽、李、
李下産、靈芝
行、值、天長節
李紅芝紫時

階前一、李樹
其下生、靈芝
想、當、天長節
李紅芝紫時

祿薄而無慍
晏天降厥靈
三莖抱石紫
瑞氣闕、幽庭

祿薄而無慍
晏天降厥靈
三莖抱石紫
瑞氣滿、門庭

朱蓋涵甘露
紫莖抽綠苔
怨卿三顧出
公退破、顏來

朱蓋涵甘露
紫莖抽綠苔
怨卿三顧出
公退笑、顏開

漱石詩六則（一海）

茯苓今懶採
金鼎不烹丹
唯、對、靈芝坐
道心千古寒

茯苓今懶採
石鼎那烹丹
日、對、靈芝坐
道心千古寒

氤氲出石罅
幽氣逼禪心
時誦寒山句
看芝坐竹陰

氤氲出石罅
幽氣逼禪心
時誦寒山句
看芝坐竹陰

第五首には種竹の朱批が見えないが、各詩、傍點を施した語が、添削のあとを示す。第一首の第一・二句などは、添削の結果下三連の禁を犯している、などの例もあるが、朱批のあとにはなかなか興味深いものがある。

ところで従來の全集は、詩題と同様、詩の第一―第四首についても、添削を経て修改された作品のみを示し、漱石の原作は示さない。

朱批が加えられ、改められた作品を、漱石作とするかど

うか、意見の分かれるところであろう。そして全集の形で示すとき、いずれを漱石作として収録するか、これまた意見は分かれるであろう。しかしいずれの形で示すにしろ、朱批の内容について、具體的に注記を加えておく必要があるのではないか。

なお、同じ熊本時代の漱石の作品に、長尾雨山が添削した例ものこっているが、この方は六七年版全集が原作について注記する。

六 喪家の狗

漱石晩年の作に、「元是……」という句ではじまる連作の五絶が六首ある。その第二首にいう、

元是喪家狗	元とはれ	喪家の狗
徘徊在草原	徘徊して	草原に在り
童兒誤打殺	童兒	誤って打殺す
何日入吾門	何れの日か	吾が門に入らん

「元是」という二文字ではじまる句作りについて、從來の注の中には、漱石がヒントを得た先行の句として、寒山詩を擧げるものがある。すなわち、「誰か知らん席帽の下、元とはれ昔愁の人ならんとは」というのが、それである。

しかし寒山の場合、右の句は五言八句の詩の末句であって、起句ではない。漱石は寒山詩もよく讀んでいたが、たぶん別の座右の書『禪林句集』（東北大學附屬圖書館漱石文庫藏）の「本とはれ山中の人、山中の話を説くを愛す」といった句などから、ヒントを得たものと思われる。

ところで、第一句の「喪家の狗」という語が、『史記』孔子世家に見え、諸國放浪中の孔子を、鄭國の人が嘲った言葉であることは、よく知られている。しかし「喪家の狗」を、家を喪った犬、すなわち野良犬、とするか、喪中の家の犬、とするか、從來の説は二つに分かれる。

しかしながら、二説の當否を詮索することは、今は必要ではあるまい。漱石の詩に注を施そうとする場合、必要なのは、漱石がいずれの説を採っていたかを、詮索することである。

從來の注は言及しないが、『吾輩は猫である』第十一章に、次のような一節がある。

「あてのない探偵の様にうろ／＼、まごついて居る君は猶更つらいだらう。累累として喪家の犬の如し。いや宿のない大程氣の毒なものは實際ないよ。」

『猫』の執筆が明治三十八・九年、さきの詩は大正五年の作であることを、考慮にいれなければならぬであらう。しかし、こうした種類の詮索は、漱石の他の詩作品に見える言葉についても、必要なように思われる。